



【問合せ】コウノトリ共生課

愛知万博が3月25日から9月25日までの会期で開催されています。日本で35年ぶりに開催されることになった万博のテーマは、「自然の叡智」で、自然界の知恵を学ぶと同時に、自然を尊重し文明と共存することを提案しています。愛知万博のテーマ館の一つグローバルハウスではコウノトリの野生復帰に向けたプロジェクトが紹介されています。ぜひ、ご見学ください。



コウノトリの展示を見入る人たち

愛地球博

EXPO 2005 AICHI JAPAN

冷凍マンモスが展示されている
グローバルハウスに

コウノトリも出演

野生復帰プロジェクトを
応援しています



パビリオンアテンダント
丹羽実由貴さん

全国各地にコウノトリがいたことを知らない人が多いようです。大型映像に映し出されるヒナの誕生がとっても人気で、子どもから高齢者の方まで注目を集め、「一度豊岡を訪れてみたい」という声も多く聞いています。自然環境を整え、コウノトリと共存していこうとするプログラムがとて皆さんから共感を得ています。私も今秋の試験放鳥を楽しみにしています。

コウノトリが紹介されているのは、グローバルハウスのオレンジホールの一隅です。人気コーナーであるシベリアの永久凍土から発掘された冷凍マンモス「マンモスラポ」の手前に展示されています。展示は、大型映像とリアルタイム映像、グラフィック・模型の3部構成となっています。大型映像では、「人と自然の輝き」と題して、コウノトリの野生復帰に向けたこれまでの経過や今秋の試験放鳥などについて紹介されています。

また、リアルタイム映像では、コウノトリの郷公園と博覧会場をテレビ電話でつなぎ、コウノトリの飼育の様子が生



中継で映し出され、来場者がパソコンのマウスを使ってカメラを遠隔操作できるようになっています。

2005年秋 コウノトリ再び 大空へ

Fly to the wild

日本の野生コウノトリが姿を消したのは1971年(昭和46年)のことでした。「いつか、きっと空に帰してやるから」と約束し、コウノトリを増やして野生に帰すための取り組みを何十年もの間、地道に続けてきました。

今年9月下旬、野生復帰の第1歩となる試験放鳥が始まります。いよいよコウノトリが再び大空へ羽ばたきます。

放鳥拠点施設が完成

9月下旬のコウノトリの試験放鳥に向けて県立コウノトリの郷公園前(豊岡市祥雲寺)に整備していた放鳥拠点施設「オープンケージ」が完成しました。

ケージの広さは、約2700平方メートル。餌場となるピオトープ(生きものが生息できる環境条件を備える場所)を高さ3メートルのネットを取り囲んでいます。

この拠点施設は、放鳥を予定している9羽のうち2羽のコウノトリのすみかとなります。羽切りしたペア1組を入れてひなを育てさせ、そのひなが野生化することを目指します。

また、放鳥の拠点施設は、同公園付属の保護増殖センター(豊岡市野上)に



放鳥拠点施設が完成し、野生復帰に向けた取り組みが着実に進んでいる

も設置する予定で、ここには2002年8月に飛来した野生のコウノトリ(雄)とカツブリングを進めるため、羽をバンドで止めた雌2羽を放します。

残る5羽については直接自然放鳥する予定です。

ケージから飛び立つ日を心待ちにしなが、同公園では放鳥訓練が続けられています。

今秋に国際かいぎを開催



平成6年に開催された「第1回コウノトリ未来・国際かいぎ」

コウノトリの野生復帰を目指し、平成6年には「その野生復帰を求めて」をテーマに第1回を、平成12年には「人と自然の共生に向けて」をテーマに第2回の「コウノト

リ未来・国際かいぎ」を開催してきました。今年9月下旬のコウノトリ試験放鳥にあわせて、兵庫県と豊岡市では「第3回コウノトリ未来・国際かいぎ」を開催します。国際かいぎでは国内外に取り組みを広く紹介するとともに、国際的な視野に立った討議を深め、まちづくりに生かしていくことになっています。具体的な内容が決まりましたら市広報などでお知らせします。

コウノトリの「切手」が登場

6月6日、コウノトリをデザインした「ふるさと切手」が発行されます。切手の種類は80円郵便切手で、イラストレーターは永田 萌さんによるデザインです。夕映えの円山川と但馬の春を彩るキンポウゲの花を背景に妖精を乗せたコウノトリが優雅に舞う姿が表現されています。このふるさと切手により、日本全国に向けて「コウノトリのふる

さと・豊岡」のさらなる発信が期待されます。



問合せ
豊岡郵便局

☎ 23・0265